

王朝の
文学空間

秋山虔

東京大学出版会

朝の文学空間

山虔

東京大学出版会

著者略歴

1924年 岡山県に生まれる
1947年 東京大学文学部国文学科卒業
現在 東京大学文学部教授

主要著書

「紫式部日記」(日本古典文学大系, 共著, 1958年, 岩波書店)「源氏物語の世界」(1964年, 東京大学出版会)「王朝女流文学の形成」(1967年, 塙書房)「源氏物語」(1968年, 岩波書店)「王朝女流文学の世界」(1972年, 東京大学出版会)「更級日記」(日本古典集成, 1980年, 新潮社)「源氏物語」(完訳日本の古典, 共著, 1983年~, 小学館)

現住所

東京都板橋区赤塚 5-25-6

王朝の文学空間

1984年3月10日 初版

[検印廃止]

著者 あきやま けん 秋山 虔 ©

発行所 財団法人 東京大学出版会

代表者 江村 稔

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内
電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 株式会社精興社

製本所 新栄社製本所

1600円

和 ISBN 4-13-083014-7 83143

I

- 1 王朝の文学空間——その始発 3
- 2 菅原道真の詩人形成 18
- 3 六歌仙時代とは何か 40
- 4 伊勢物語——「みやび」の論 55

II

- 5 男の文学と女の文学——宇津保物語と源氏物語 71
- 6 女流日記文学の発生——蜻蛉日記と更級日記 89
- 7 蜻蛉日記の文体形成——地の文に融合する引歌 96
- 8 ふたりの才媛——清少納言と紫式部 122

III

- 9 光源氏像一面——その政治性について 139
- 10 好色人と生活者——光源氏の「癖」 149
- 11 物語世界と後宮 167
- 12 源氏物語の和歌をめぐって 179
- 13 源氏物語の敬語 198
- 14 源氏物語の文章表現——挿入句をめぐって 225
- 15 源氏物語と「源氏物語絵巻」の間 242

あとがき

261

I

1 王朝の文学空間——その始発

「文学空間」とは何か。実際の歴史的現実とは別個の、いわば想像力の所産である非現実の文学的世界と理解してよいだろうか。とはいふものの、考えてみるまでもなくそれは現実と無縁の世界ではありえない。かえって現実そのものの欠如への対応として能動的に産出される世界であるから、それは現実を超越するものでありながらあくまで現実に立脚し現実に還帰する、その意味で、現実より以上の現実世界であるということができ、そこにその時代を見ることができるとは、もちろん、それは現実の時代・社会の単なる射映がそこにあるということではない。

たとえば九世紀の、いわゆる国風暗黒時代——小島憲之氏はこれを「漢風謠歌（讚美）時代」と積極的に言い換えておられる（1）——、あの勅撰三集にその詩文の編集された嵯峨時代の文学を、単に嵯峨天皇（上皇）の唐風趣味によって領導され盛り立てられた貴族官僚たちの好尚が反映しているなどと理解するだけで事がすむわけではないだろう。

代表的な詩作の若干を引く。文華秀麗集所収の有名な嵯峨御製「河陽十詠」のうちである。

河陽の花

三春二月河陽かやうけん泉

河陽もとよりは從來花に富む

花は落つ能くも紅かに復はた能くも白し

山の嵐あざ頻りに下して万条斜なり

江上の船

一道の長江千里に通ひ

漫々なる流水行船を漾たははす

風帆遠く没る虚無むちの裡

疑ふらくは是仙查の天に上らむとするかと

同集には、右のごとき御製に奉和する侍臣の作をいくつかおさめる。任意に引き添えておく。

河陽の花

藤原冬嗣

河陽の風土春色にぎは饒ひ

一県千家花ならぬは無し

江中に吹き入りて錦あはを濯あふが如く

機上に乱れ飛びて文紗ぶんさを奪ふ

江上の船

仲雄王

晴初蹕を駐めて玄覽を馳せたまふ

一点孤り浮かぶ江上の船

物情虚しくするが為に相怨みず

吹に乗りて遙かに度る浪中の天

小島憲之氏によれば、これらは弘仁四年ないし五年の二月の製作であろうかとされるが(2)、それはともかくとして、この淀川の北、山崎の辺の河陽の地が、中国の黄河の北、西晋の詩人潘岳(安仁)が県令となつて桃花を植えたことと有名な地名を移しているそのこと自体にも見てとれるごとく、そこには中国の詩の表現にもとづく河陽の風情を日本のこの地に演出する意識が明白であつた。はたしてこれが山崎の地の実景に瞩目しての叙景であるのかと問ふことはもとより愚かであろう。

「河陽は従来花に富む」の河陽は潘岳の昔から花に満つ河陽のイメージを日本のこの地におし当てているのである。というよりも、中国詩の表象に膚接する模写の姿勢の前に、眼前の実風景は奉仕させられているといつてよいかもしれない。言々句々の抛り所となつてゐる中国詩句を引証する小島憲之氏の作業によつて、嵯峨とその周囲の文人の発想とがいかに中国詩文のそれに領略されるものであつたかを実感することができるのである(3)。

江談抄所載の、小野篁の詩才を賛美する伝承を思い起こす。嵯峨天皇が河陽離宮に行幸のとき、「閑ヲ閉ジテタダ聞ク朝暮ノ鼓 楼ニ登リテ遙カニ望ム往来ノ船」という詩句をわが作として篁に示された。篁は即座に答えて「遙カニ」を「空シク」と改めたら詩趣は断然まさるであろうと言上

した。天皇のいわく、じつはこの句は白楽天の作で、もと「空シク」とあったのをわざと「遙カニ」と改めて汝を試したのであると。この時、『白氏文集』の一本のみ渡来しており、天皇の秘蔵するところで誰もこれを見ることができなかったという。天皇は白楽天と変らぬ篁の詩才に感嘆し賞賛したというのである。同じ江談抄の伝承によれば、本朝に名の聞こえた白楽天であるが、彼もまた海彼で詩人篁の名声を聞き知っており、わざわざ望楼を作つて篁が遣唐使となつて渡唐する日待つたが、ついにそのことは実現せずに白楽天は没した。のちに『白氏文集』は日本に渡来したが、そのなかに篁の作れると同じ句が三例あつたという。いつのころ發生した伝承なのか知る由もないが、中国の詩人と合同するそうした詩人のありようが一途に理想とされた九世紀の「漢風讚美時代」を象徴するのである。

天皇を中心とする宮廷貴族の世界における徹底した中国受容、というより日本における中国の演出がなぜ必要であり、なぜそうなつたのか。もともと漢字を使用することなしに律令国家の運転は不可能であつたから、貴族官僚たちによる漢字漢文の習得が第一義的な意味をもつていたことはいうまでもない。もと学令によれば官僚養成機関である大学寮における教育は嚴格な試験制度のもとに儒学の經書あるいは注釈書を学習することにあつたが、平安期ともなると、本来は従の位置にあつた紀伝（文章）科の盛栄化とともに、文選・爾雅・三史を中心にさらに老莊古典その他を加える多彩な漢籍の知識が要求されるようになったことを思えば、彼らの意識がこの先進異国の文字に縛られるほかなかつたのも見やすい理であるといえよう。そのことによつてこの東海の島国日本は、

漢字文化圏の一隅に位置する律令国家として存在することができたのであった。

しかしながらいま当面の嵯峨時代の異常な中国への傾斜に關していえば、天皇の父、平安京の經始に踏みきった桓武天皇の事蹟と政治理念のなかにこの特異な時代を招き寄せる土壌が培われたと考えられるし、また桓武に次ぐ平城朝から嵯峨朝への移行の過程における、いわゆる二所朝廷の時代の緊張への対処としてそれが必然化されたと考えられるのだが、この間の事情に深く立ち入るとはできない。朝廷の風儀万般が唐風一色に塗りつぶされるなかで、あい類しきる作文会が宮中や洛中は神泉苑ほか諸院離宮、また洛外も前記の河陽その他の行幸に際して催されることになるが、こうした君臣和樂の文遊こそ、儒教的礼文主義、あるいは文章經国思想に支えられるものであり、その意味においてそれは政治的实践としての意味を担うものとされたのである。そうした文事が、しょせんは觀念の中国を幻想する營為であり、律令体制の崩壊を一途に歩んでいた社会構成全体の動向に対する、いわば觀念的粉飾として追求されたものであるといってしまうればそれまでである。また三集のどこから当時のどの作を抜き抜いてみても、局限された発想あるのみで、そこに作者の個性表現を見ることができず、個人の思想・心情をそこに託すものでありえぬとする評言もあながち斥けるわけにもいくまい。しかしながら前記のごとき文章經国思想を抛り所とする公的要請のうえに、一途に中国詩文の措辞をいわば本説とする觀念的な表現がめざされたのであり、そこに土着性を払拭した国際性もちえたことは注目するに足る。こうして、貴族官僚の意識、というより血肉の位層にくいこんだ漢詩文の発想と技巧のうえに平安朝の文学空間がまず開發されたといふべきだろう。

そのような嵯峨時代の漢文学の到達がいかなる次の時代を招いたか。私は勅撰三集の編集のすべてに従事した菅原清公を祖父とする道真の文学に興味を寄せている。三代にわたる蓄積のうえに開花した菅家文章・菅家後集の世界には、嵯峨時代の公的な保証のゆえに成り立った漢字によって組みあげられるあの異国的な文学空間のもっとも正統の後継者であろうとするほかなかったがゆえに、その許容されえぬ九世紀末の時代状況と格闘し、詩人としての自覚を尖鋭化し孤絶し、みずから破滅に追いこまれるほかなかった個人の運命の表象を見ることができるのである。

そのことと入れかわるように古今集の時代が到来することになるのであったが、宮廷社会に浮上してくる和歌が、かつての万葉和歌と異質に、いかに「漢風讚美時代」の表現の方法を内質化するものとなっていたか、この問題は小島憲之氏の『古今集以前』その他の細緻な労作において克明に考察されるところである。以前には小西甚一「古今集の表現の成立」⁽⁴⁾や安藤テルヨ「古今集歌風の成立に及ぼせる漢詩文の影響について」⁽⁵⁾などの研究もあり、漢詩文受容においてこそその独自の表現性をもちえた古今集和歌の諸相が追求されていたこともあらためて注目される。そうした数数の研究は万葉集評価の座標のうえに古今集をひきすえ、それを万葉の全一性が崩壊して知的・技巧的な遊戯に墮するものとなったとする、従来の何となく踏襲されてきた見かたを棄却し、そこに組成される独自の文学空間に開眼しようとする視座の支えともなる。安藤論文が、古今集和歌を特徴づける理智的・語戲的発想（小西論文では主としてそれと六朝詩との関係が追求された）のほか、

譬喩的発想、自然と人事との融合的発想、時間的発想、観念的発想等に大別し、またそれぞれにつき細目を立てつつ、具体的に六朝・唐詩の発想の摂取を論じていることも貴重な指針を提供していた。

もとより和歌が宮廷貴族の世界に進出してきたのはその基盤あつてのことである。公的な世界からはほぼ閉め出されていたものの、この国の固有の文芸として私的なまた民間の位相での人間連帯の具として機能を保ちながら和歌は旺盛に生きつづけていた。それが、漢詩文学の支盤の喪失とともに露出し上昇してきたのである。この漢詩から和歌へ、という転換はすぐれて文学史的な問題であるが、それをそのまま追認記述するのではなく、その必然的な理路にメスを入れた労作として鈴木日出男「古今的表現の形成」(6)が思い起こされる。古今集和歌の、詠歌の場に導かれつつも、それを超え事実を解体して知的に再構成する思考と表現、感動が発見的な判断思惟に集注する、いわば観念象徴の方法等、氏の指摘することは従来もくりかえし論及されてきたところであるかもしれない。しかしながらそうした古今集和歌の特色が、これに影響する漢詩の技法の移しであることを比較論的に明らかにする作業に尽きるのであったらそれはしよせんその次元のものにすぎないだろうし、また古今集時代の社会構成の変動によって醸成される生活感情や思考法の反映としてその表現をとらえることもいささか機械的であるといえよう。極言すれば、古今的表現としかじかの生活感情や思考法が同時代的に存在したがゆえに併記されたにすぎないということにもなりかねないのではないか。鈴木論文に共感されるのは、古今集和歌を万葉以来の表現史のうえに相対的に位置づ

け、また氏のことばの「嵯峨文学圈」の漢文学のありかたとの時代的位相差を標定することによってその独自性を際立たせ、かつ機能的側面を社会構成の変動と構造的に対応させつつ考察しようとする複眼的な視座を統一的に設定しているからである。ただこの鈴木論文に触れられることのなかった、かな文字の問題——和歌を表記する新国字の発明と普及によってもたらされたものの重さについては、いささか言及しておくほうがよいだろう。

いったい固有の文字をもたなかった日本人はただ一途に漢字と漢字の羅列になる漢文を習得し、これを用いて自己のことば||日本語を表記するほかはなかった。そのためにかなる工夫がなされてきたかは、数々の上代文献によって知りうるどころだが、例の古事記序文が語る苦心のごときは、漢字・漢文の習熟度がいかに高まろうと、日本人が日本語を用いるかぎりどこまでもついてまわる課題であったはずである。日本語と漢語との構文的特色は決定的に異なるわけだし、ことに日本語に特有のいわゆる辞——概念過程を経ない言語主体の直接的な表現は、漢文によって表わしえないのである。万葉がなの発明があり、漢字の音・訓を借用するこの文字によってたしかに日本語を音のまま十全に表記できるようになったとはいえ、それとてもとより漢字の借字であり漢字に依存しての表記法であることに変わりはないのである。してみればかな文字が、もとの漢字の字母から独立する一字一音の簡略な国字として誕生してきたことは、日本の文化史のうえで期を画する創造的意味をもっていったことになる。それが一朝一夕に発明されたのではないことはいうまでもない。

前記の万葉がなが、日常生活のなかでの備忘や消息や和歌などを記すため私的に用いられるという長い期間が当然先行していたはずで、その過程に行なわれたであろう字形の草化のはてに、それから脱化したかな文字の独立があったのである。宇津保物語や蜻蛉日記のなかの用例によって、このかな文字が「女手」と称されている（「男手」が万葉がなの楷書、行書体であるのに対して）ことは象徴的であるといえよう。表立った公的世界の裏面の、女性中心の私的な場で用いられる私用文字という意味をはらんでいるからであるが、しかしながらそうした意味を担いながら実態としてそれにとどまらず、漢字を自己の文字とする識字層の意識の交革を強いつつ彼らをつつみこんで上下に広く急速に普及することになったのは重大である。古今集成立を準備するものとして、それ以前の歌合が指摘され、また初期屏風絵が注意されているが、そこでは和歌がその書かれたかな文字とともに視覚の対象として玩賞されるものとなっていたのであろう。もちろん現存する古筆の遺品にみる優麗繊細な連綿体をいきなり想像することは誤りであろうが、藤原定家筆の土左日記（前田家本）に模写されている紀貫之の筆跡が、古樸といえどもすでに万葉がなの草体をはるかに脱していたことも思い起こされるのである。

さて前記の鈴木論文には、和歌が漢詩の観念的思考性を受けつぐと同時に、それは漢詩の支えであった文章経国の理念などもたぬだけに官人集団を超えて貴族社会の社交の具となって風俗化するという二重性の経緯が照らし出されていた。古今集の表現技法——掛詞・縁語・擬人法・見立てなどの形成の問題、および総体としての類型的・抽象的な発想・趣向をその二重性の論理のうえに説

明されたのだが、かな文字の普及という因子をこれに加えるとき、和歌が文字に表記される安定した客観的なかたちとして貴族社会の風俗とのなじみを深め、そのことが逆に生活感情や思考の和歌世界への積極的な転位作用を促進するものとなるであろうことも容易にうなずけることである。ただし和歌は和歌それ自体として宮廷貴族の創作文芸となるのではない。また、かな文字はかな文字自体として弘通するのではない。両者が不可分の関係で社会化したというのが具体的なありかたであったと考えられよう。公的な世界での公的な文字や文学（漢字・漢詩文学）に対する、私的世界での文字や文学ではなくなったのである。そのことは律令社会の「公」がもはや「公」でありつづけることなく、藤原氏権勢の「私」によって実質的に浸蝕されつつあるという決定的動向と緊密に対応するものであるけれども、じつはこうした日本国内の社会構成の問題にのみ視野を限定するわけにはいかない経緯がある。

日本もそのなかの一としてかかわりつなっていた東アジア漢字文化圏全体の変質という問題であった。いったい前述の「漢風讚美」も、わが律令国家が体制の整備貫徹のために大唐帝国の先進文化を規範とし、その移入を至上命令としたからであったが、そのことは唐帝国が八世紀の半ば、いわゆる開元・天宝の治の完熟を経て安史の乱（七五五―七六三）以後、衰退の一途をたどる時期となっても変わることはなかった。困難な航海による日中両国の交流関係であるだけに、唐帝国の隆替と直接にはかかわりなく、またわが国内事情から遣唐使派遣が間遠になればなるほど、かえって唐土への憧憬は一途となる、という事情があった。しかしながら唐帝国が十年にわたる黄巢の大乱